

国・郡分割と藤原氏

上 奈良時代初期中期を中心とした

佐藤 仁

一、
律令政治の施行は一つに地方政治の可否に存するといつても過言ではあるまい。中央政府の充実に資することながら、それに伴う地方諸制度の整備強化こそ律令政治の原動力といふところではなからうか。實際当代の史料を紐とく時、為政者達はそれその時代の背景を背負いつゝ、律令制施行の爲、地方政治体制に意を用いている事が知られる。

さて律令時代の地方行政強化政策には大方次の二大方針が存したと考えられる。即ち、

(1) 国司、郡司、里長、巡察使、按察使等に關する強化策。地方政治担当者を増加、縮少、新設、廃止する事により、又肅正する事により、地方

政治を充実せんとする方針。

(2) 地方行政区劃の適正化。即ち国、郡、(へ)郷、里等の行政区劃を合理的に設定し地方政治の徹底をはからんとする方針。

二者は地方支配上重要な課題であり、両者は常に平行して用いらるべきものであり、二大方針の徹底、不徹底は直ちに中央政府に跳返る事となる。内容の信憑性はともかく、かの大化改新詔中(1)に於ける規定が見える事は、少くとも日本書紀成立年(2)にこのような地方施策が中央政治家の間に存した事を物語るといふよう。

今日の学界においては(1)の向題について幾多の先学が考察を試みられ、成果をおさめて居られるが、(2)の点については、国歌、郡歌等に關して論

せられる程度で余り研究が進められて居るとはいへない。私はこゝで律令時代の内、特に国・郡の分割・統廃合の激しかった奈良時代初期―中期に時代を限定し、地方行政区画（国・郡）の変化の実態につきさゝやかな考察を附陳することゝしたい。

註(1) 孝徳天皇紀二年春正月条。

へ前略。其二日。初修京師。置畿内国司。郡司。關塞。斥候。防人。聚馬。傳馬。及造鈴契。定山河。凡京每坊置長一人。四坊置令一人。寄持檢戸口督察奸非。其坊令取坊内明廉強直堪時務者宛。へ中略。凡郡以四十里爲大郡。三十里以下四里以上爲中郡。三里爲小郡。其郡司並取因造性識清廉堪時務者爲大領小領。強弱適敏工書卒者主政。主帳。へ下略。

二

奈良時代初期―中期は律令時代又それ以外のいかなる時代にも見られぬ程、国郡の新設統廃合が活発に行われ、地方行政への関心の深かつた事が

知られる。これが原因については後述する事とし、論述の都合上、まず国数郡数の変動について考察しよう。

奈良時代初期の国数は一志賦役令集解調庸物条古記⁽¹⁾記載の民部省式を基礎とし、不隔な点を他の史料から補う事により求められる。全式には近国十七⁽²⁾、中国十四、遠国十六と距離別に国名が示されているが、この内、遠国の中に九州地方諸国が一括して竺紫国の名で記載されて居り、又近国には畿内が含まれていない故この分を補正する必要がある。こゝで九州の国数を和銅初年迄の史料より求めるならば、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向・薩摩の八国の存在が確認され、一方畿内諸国は大和・山背・河内・摂津の四国であり、これら十二国を加算する時一志五十八国なる数字が求められる。この他壱岐・対馬・多岐等三島の存在も考慮する必要がある。然らば本式の成立はいつ頃に求められるであろうか。上限については知る事が出来ないが、下限に関しては、出羽国を定め和銅元年に成立した諸国⁽³⁾が含まれていない所

から、それ以前、即ち和銅五年九月以前に差せられたものと思われ、こゝに示された国名、数は當時の姿を写すと考えられる。

（日本書紀、古事記の中に見える国名は、成立当時のものの他、大化前代の国名をも含みそのまゝ信用する事は出来ず、本式の国名算出上の意義は大きい。）

この国数が奈良初期の状態でありこれを基本とし、国の分割・統廃合を見て行こう。前述の如く和銅五年九月には出羽国が越前国を母体として発足。翌六年には

丹波より丹後

備前より美作

日向より大隅

がそれぞれ独立して一国を形成。国数は六十二国三島に。聖武二年には和泉監が河内の国をさいて分立、芳野監もこの頃置かれた。養老二年には

越前より能登

上遠より安房

陸奥（一部常陸）より石城

陸奥より石背
等の諸国が分立、更に養老五年には信濃国から諏訪国が独立、国数は最高となる。

しかしこれ以後国は一時減少する。神龜年間には石城、石背が陸奥に併合され、次いで天平三年には諏訪が信濃へ、十二年には和泉監、十三年には安房・能登が併合、天平十五年には佐渡が越後に吸収、又この頃迄に芳野監も姿を消している。

以上の如く国数は急激に少くなつたが、やがて再分割の段階に入る。天平勝宝四年、佐渡が独立、天平宝亨元年には能登・安房・和泉が再設置される。かくして奈良時代の国の分割は終了する。和名抄、延喜氏部式所載の国名は、これに加賀国分立、多摩島の併合を処理したものである。

然らば郡の増減はどうであらうか。奈良初期より中期迄には左の如く分割・新設が行われている。

越後国出羽郡

遠江国長田郡

備前国草田郡

和銅

元

全

元年九月

二年二月

二年十月

上野国多胡郡
 摂津国能勢郡
 陸奥国丹波郡
 美濃国常田郡
 陸奥国香河村建郡
 全 内村建郡
 武藏国高麗郡
 常陸国常田郡
 志摩国佐芸郡
 佐渡国賀母郡
 全 羽茂郡
 備前国隠原郡
 備後国深津郡
 周防国玖珂郡
 陸奥国功田郡
 陸奥国山名郡
 陸奥国田表村建郡
 出羽国雄勝村建郡
 大隅国菱刈村建郡
 武藏国新羅郡

和 銅 四年三月 (21)
 全 六年九月 (21)
 全 六年十一月 (22)
 聖 龜 元 元年七月 (23)
 全 元年十月 (24)
 全 全 (24)
 養 老 二年五月 (25)
 全 三年四月 (27)
 全 五年四月 (28)
 全 全 (28)
 全 全 (28)
 全 全 (28)
 全 全 (28)
 全 五年十月 (29)
 全 六年二月 (30)
 天 平 二年一月 (31)
 全 五年十二月 (32)
 天平勝宝七年五月 (33)
 天平宝字二年八月 (34)

陸奥国泉原郡

神護景雲元年十一月 (35)

以上等げた二十四例の他、奈良時代の史料と平安時代の資料の比較から増加郡数の算定ができない訳ではない。

ゆゑ雲国は天平五年風土記成立以後和名抄完成迄に能義郡が増加³⁶⁾。

四幡唐国では風土記に赤穂郡なく、和名抄成立迄一郡増加。

の四二例以外には対比の際ほど一致を見、奈良後半以後郡数に変化が少なかった事が知り得る。へ實際上の四三奈良時代に増加したとは云い切れな³⁷⁾い。この事は、奈良時代中期迄に成立したといわれる律書残篇の郡数と和名抄延喜式とを比較すると次表の如く約四分の差が見られ、その差はさほど多いものでなかったことにより知られる。奈

署 名	郡 数
律書残篇	五五五
和名抄	五九二
延喜式	五九〇

良時代後半及び平安時代における郡の増加は約四〇であり、奈良中期迄の郡の増加及び郡数は信賴出来るのでは

なからうか。

なお統合された例はゆすか一例、養老四年摂津
堅上・下河郡の併合、大泉郡の新置があげられ
るのみである。

註①武長令集解調庸物条。

古記云 間遠並程若爲 答 依民部省式道國

十七 伊我 伊勢 尾張 參河 丹波 因幡

備前 阿波 紀伊 讃岐 近江 三野 毛

越 但馬 播磨 淡路國也 中國十四遠江

伊豆 相模 信野 越中 駿河 甲斐 斐太

越前 伯耆 出雲 備前 伊豫 備後國也。

遠國十六 上總 常陸 武藏 下總 上野

下野 陸奥 近江 周防 石見 土佐 越

後 安芸 長門 隱岐 三紫國也

(2) 並國十七とあるが國名は十六しか記載されて

いない。志摩國が脱落しているのであらう。

(3) 統日本紀和銅五年九月己丑条

(4) 美作 丹後兩國(和銅六年)

(5) 統日本紀和銅六年四月乙未条

(6) 統日本紀靈龜二年四月甲子条

(1) 統日本紀養老二年五月乙未条

(2) 統日本紀養老五年六月辛丑条

(3) 全右 天平三年三月乙卯条

(4) 全右 十二年八月甲戌条

(5) 全右 十三年十二月丙戌条

(6) 全右 十五年二月辛巳条

(7) 全右 天平勝宝四年十一月乙巳条

(8) 全右 天平宝字元年五月乙卯条

(9) 須聚三代拾分置諸國事。(弘仁十四年)

(10) 全右 (天長元年)

(11) 統日本紀和銅元年九月乙酉条

(12) 全右 二年二月丁未条

(13) 全右 二年十月庚寅条。

(14) 全右 四年三月辛亥条及び多胡碑

(15) 全右 六年九月己卯条

(16) 全右 六年十二月辛卯条

(17) 全右 靈龜元年七月丙午条

(18) 全右 元年十月丁丑条

(19) 全右 二年五月辛卯条

(20) 全右 養老二年五月乙未条

②⑦ 続日本紀養老三十四月丙戌条

②⑧ 全右 五年四月丙申条

②⑨ 全右 五年十月戊子条

③① 全右 六年二月丁亥条

③② 全右 天平二年一月辛亥条

③③ 全右 五年十二月己未条

③④ 全右 天平勝宝七年五月丁丑条

③⑤ 全右 天平宝字二年八月癸亥条

③⑥ 全右 神護景雲元年十一月乙己条

③⑦ 出雲風土記では

意守 盛根 秋鹿 猪登 出雲 神内 飯

石 仁多 大原

計九郡が見え、和名抄では能登郡が加わり十郡となっている。

③⑧ 井上通泰博士は郡はあつたとし、文章が作られなかったと考えて居られる。へ播磨風土記

新讀)

③⑨ 坂本太郎博士「律書殘篇の一考察」中央学雑誌

四五の十一

④ 続日本紀養老三十四年十一月乙亥条

三、

こゝで以上の国郡の分割理由について述べて見よう。

国の分割に関する規定は令文中には見当らず、集解・義解には別の式の存する事が認められ居る程度しか史料がない。又具體的な分割記事も分割年月・分割母体の国名・新設国名等の記載のみで分割の理由は記されて居らない。へ出羽国のみ理由が記されている。国がいかなる理由(規定)により分割されたかは今後の研究による他ない。

郡の分割の規定も令文には記載はない。しかし郡の大きさに對する規定が存し、ある限度より千戸(二十郷)以上になつた場合の分割が予想される。しかして義解・集解は分割方法に對し一定の解釈を与えているが、諸説共千戸以上の場合に分割を論じ、一千百戸未満の場合は余分を他郡に併合、一千百戸以上の場合は新郡が設置される旨述べている。これが正式手段であるが、この地勢不便で隣郡への併合困難な場合は官に申告す

る事により設置出来る旨記されている。

奈良時代成立の古記にもこの記載があったらしいが、⁽⁶⁾實際史料上ではこの通り施行されていたであらうか。奈良時代には入口が著しく増加した事は周知の所であるが、郡の増加の際、これを理由としているものは皆無である。この事は、分割の際の原郡と新郡の郷数の緩和を求める事により更に明確に知られるのであり、これによると

の志摩国洛志郡より佐芸郡が分割された際、佐芸郡の郷数は五、原郡の郷数は不明であるが和名抄時代には郡四、歌家、神戸各一であつて時代的にいへば離れくはいるが、地味も悪く耕地も少なく、かつ國分寺すらもろこたえ得なかつた志摩国の國狀から見ても、これ以後の人口の増加は見込む事は出来ず、又郷数の増加もない点から、洛志郡が更に分割した事は考えられない。かく考へて来ると洛志郡は佐芸郡を分割した後も郷数に大きな変化があつたとする事は不可能で、佐芸郡を分へ以前の郷数は十一位と云わねばならない。

の養老六耳に於ける遠江国山名郡の新設は佐益郡の内の八郷で行われる。一方原郡の郷数は和名抄には六郷しかない。両者併せても十四郷である。

(イ)常陸國菊田郡は養老二耳二百十郷をもつて多珂郡より分立したが、この戸数は四郷一余戸に相当。一方和名抄も全く四郷一余戸。一方多珂郡は八郷が記され、結局奈良初期には多くても十二郷程度であつたと考えられる。

(ロ)和銅四年には上野国多胡郡が新設されるが、これは隣接する三郡の一部を令ち三百戸六郷を形成したもので、和名抄時代においても母体三郡は大きい郡ではなく、派出した郷を加えても二〇郷にはなり得ない。

の山陽道では和銅二年十月備後国に甲努郡が品置郡三里へ郷を令ち成立、和名抄時代には品置郡は七、甲努郡は三郷、結局和銅頃と大差ない事が知られ、この点から、分割直前は十里(郷)位の郡であつたと想像出来る。

以上の如く郷数の和が二十になるものではなく、分

割が規定通り二十郷以上になった爲、行われたと考へる事は困難である。ゆゑ中の諸例は分割記事に新郡の里(郷)数の記載の存する場合のみをあげたが、他の分割例を和名抄を利用して計算しても全様な結果が出て来る。平安初期弘仁十四年六月、越前国丹生郡が分割され今立郡が作られ、又加賀国江沼郡より石川郡、加賀郡より能美郡が分割される際の理由に、

以地広人多也

と見えるが、この際も三者共二十郷以上にはなっていない。

以上の諸点より、郡の分割は人口増加には余り関係の存せぬ事が判明した。實際人口の増加はしたであらうが、これが郷の増加と直接に關係したとは考へられず、單に戸内の人數増加に止つたとも考へられる。

然りとすれば郡はいかなる理由で分割されたであらうか。一は当代の分割記事を分類すると第一に目のつづの「地勢不便」を理由とするものである。和銅二年遠江国長田郡の分割には

地界廣遠 民居遙隔 往還不便

と見え、今年隨後国葦田郡より品置郡が作られる際も

山谷阻遠 百姓往還 煩費太多

和銅六年摂津河辺郡より能勢郡が作られる際には

山川遠隔 道路險難

又聖武元年陸奥国の開村に郡を置く事を請うた際には

今国府郭下 相去道遠 往還累回

が理由となつて居り、かゝる点は律令時代を通じて見られる所である。整理するならば

巾山、川、谷等地形が悪く交通困難。

(四) 郡家への距離が長い事。

(五) 区域が広い事

等であり、分割事由の明記されている史料の大部分がこれに属する。

次に注意すべき事は國勢の南北への伸長及び開拓の爲の建郡である。当代には蝦夷の征服、集入の内陸化が行われ

出羽郡 丹波郡 香河郡 南河郡 近田郡 田原

村 佐藤村 泉原郡 (和名和名) (和名和名) (和名和名)

等が東北地方に郡として成立し、一方向南九州地

方でも本國國豪利村の昇格が要請されている。一方南拓関係は帰化人と結びつき

豊 龜元耳 美濃國席田郡 〓新羅入

全 二耳 武藏國高麗郡 〓高麗入

天平宝字二年 武藏國新羅郡 〓新羅入

の如く集團入植が爲されてゐる。かくの如く帰化人に土地を与へ開墾させる方式は我國古代に亘く行われたもので奈良時代施政者にもこの方法が用いられた筈である。

以上分割事由を調べると、令制通りの分割（東北九州地方の新設を除く）は皆無と云つてよく、大部分は義解・集解に見える特別な場合の規定を利用して分割を行つていたと考えられる。實際人口・戸数等を基に一定の規定を作り、それにより、行政区画を定める事は様々な不合理、不円滑な点が生じたであらう。又国力の伸張にともない、律令政府の支配下に入る民も増加し、又前述の如く戸内の人口増による郡政の増大等々種々矛盾を解決せんが爲に取られた策であらうと思われる。一定こゝで令の規定と分割はあまり強い關係を持たな

かつた事を主張したい。

所で郡の分割を更に考察すると他にも非律令的面を発見する。

その一は建郡に際し、令の規定には見られぬ「村」なる單位が登場する事である。

和 銅二年 建郡於甲努村。（備中國鞆田郡）

六年 河邊郡於左佐村。（摂津貳能勢郡）

靈 龜元耳 請於香川村。（陸奥國）

全 平二年 請於内村。（陸奥國）

五年 於雄勝村建郡。（出羽國）

天平勝宝七年 於栗川村。（大隅國）

「村」なる單位は郷（里）の内部に含まれる自然村落と考えられ、新設郡の位置をかくる單位で示すことは、それがたとえ郡家の位置を明細に示す爲であるとしても、非律令的表現である事はぬぐい切れない。

次に向題になる事は建郡の際の活動は誰がしたかである。大化以後の各種史料を見てゆく時の常陸國多珣、行方郡分割には

汝城國造小乙下壬生連麻呂

郡河國造大連壬生直夫子

多珂國造石城直美夜郎

石城評造郡志許赤

④肥前國三根郡は海部直島

⑤伊予國越智郡は越智直

などが活動し分割、建郡が爲されてゐる。奈良時

代にも類例が存する。即ち

⑥美濃麻田郡は麻田君が

⑦陸奥の蝦夷の場合も臣良志別、須賀君などが代

表者として見えて居る。

奈良時代の例は少ないが平安初期、藤原國磐梨郡、

和氣郡分割の際における旧國造和氣清麻呂の動き

から、旧國造家の活動は郡の設立に大きな關係を

有したものと推測し得るのではないらうか。

以上郡の分割について長々と述べ来つたが要す

るに郡の分割、新設には非律令的な面が非常に強

めつたと云う事が窺き出される。

註(1)戸令集解 義解定郡条。

②戸令定郡条。

8 才

凡郡以廿里以下・十六里以上・爲大郡・十二

里以上爲上郡・八里以上爲中郡・四里以上爲

下郡・二里以上爲小郡。

③謂。郡不得過千戸。若餘五十戸以上者・隸入

比郡。若隸入比郡。地勢不便。……

④寂、古記、六、跡、令寂等。

⑤古記の記事は寂のあとに割注で

古記同文。

に見えるのである。

⑥和名抄 志摩國次七十五

答志郡

答志、和具、伊可、伊雅、驛家、神戶、

⑦日本後紀大同四年閏二月条

辛亥、始遷志摩國國分二寺僧尼安置伊勢國

國分寺

⑧和名抄、壹江國才七十八

佐野郡

山口、小松、邑代、曙羅、日根、取家

⑨和名抄 陸奥國才九十四

菊田郡

(10) 和名抄 常陸国又八十七
酒井、河邊、山田、大野、糸戸、

多珂郡

梁津、伴部、高野、多珂、藻島、新居、
賀美、南口、

(11)

片岡郡	緑野郡	日良郡	多珂郡	和名抄	和名抄
1	1	4	5	11	13
5	11	13	17	12	17

(12) 和名抄 備後国

品置郡

駄家、岳治、狩道、佐我、石茂、神田、

服嶽

(13) 和名抄 備後国

甲努郡

天野、甲努、田穂

(14) 常陸凡工記多珂郡系

(15) 肥前凡工記三根郡系

(16) 日本霊異記 上一七

(17) 続日本紀延暦七年六月癸未系

四、

さて以上述べ来つた如く、国及び郡の分割は奈良時代初期—中期を通じて盛んに行われ、全般的に見ると国郡の数は次第に増加している。しかしその分割年次を細かに考察してゆくと、それは一定の速度で進行して行つた訳ではなく、そこには一つの傾向が認められる。本章では国郡分割を奈良朝政治史の面から更に考察する事としたい。

まず国郡分割年次を奈良時代全体からなめる時、その過程は凡そ次の三つに区切る事が出来る。オ一の段階は和銅初年より養老末年に至る奈良時代初期十五年間。この時代には国郡分割が他の時代に比する事ができない程積極的に行われている。即ち国においては出羽を始め丹後、美作、大隅、和泉(監)芳野(監)能登、安房、石城、石背、諏訪等の諸国が設置されて居り、一方郡の場合、越後国出羽郡をかめきりに前述の如く二十四の郡が次々に設置されている。この際この時期を

応極期と名付けた。この期は、
 所でこの様な分割に対する熱意も聖武天皇期に
 入ると次第に冷却し分割は郡において僅か二件を
 教うるのみで国においては並に縮少の傾向が現わ
 れて来る。即ち神龜初年における石城、石背の鹿
 上、次いで天平期に入ると和泉、芳野、佐渡、能
 登、安房等の諸国が併合されている。前代におけ
 る積極策の反動とも云うべき時代で、この時期を
 応消極期と名付けよう。

一方奈良時代も聖武天皇期をすぎると再び分割
 が活況となる。即ち天平勝宝頃から後がそれ、
 前代に廃止された佐渡、和泉、安房、能登等の諸
 国が復活すると共に、大隅、陸奥方面に新郡が作
 られている。この期の特色が復活にある所より、
 復活期と名付け論議の便をしたい。

かくの如く国郡分割には三つの傾向が考えられ
 るがそれは一体何によって発生したのであろうか。
 こゝで一応奈良時代に於ける政权の推移と考へ合
 わせて見よう。

奈良初期の政权は藤原不比等を中心として、

は一種の内閣が保たれていたが彼の死は長屋王を
 中心とする皇親政治をおこす事となり、一時藤原
 氏は弱体化する。しかし藤原氏の回復運動は功を
 奏し長屋王は失脚する。やがて西南に発した天然
 痘は藤原氏の主力を失わしめる所となり、橘氏が
 これに代る。諸兄の右大臣、左大臣の在任期間
 は天平勝宝八年に及ぶが、この頃に至り藤原氏はよ
 うやく回復し、仲麻呂が政界に登場し橘氏に代る。
 結局藤原氏の政治担当期間を整理すると

の和銅初年―養老四年 藤原不比等全盛
 四養老五年―天平勝宝初年 藤原氏弱体、長屋王

橘氏政权

の天平勝宝初年―藤原仲麻呂全盛

の如くなり、これを国郡分割問題と考へ合わせる

時、

復活期Ⅱ(イ)

消極期Ⅱ(ロ)

復活期Ⅱ(ハ)

の様にほぼ一致している。かく考へて来ると、藤
 氏政权と国郡分割とは密接な関係をもつてゐるのを見

方が許されるのではなからうか。

この事を更に裏付けるものは消極期において爲された郡の分割が弱体なりと云え、藤原氏が相當な地位にある時に行われていたという事である。即ち天平二年陸奥国田舎村が郡になる際、又天平五年出羽国雄勝郡設置の際、両者共藤原氏智麻呂が不納言としての地位を保ち、彼の上には知太政官事一品舍人親王が居つたに過ぎない。

このように藤原氏は国郡分割に対し熱心な態度を示しているが、この問題を更に発展させると才一に中間の消極期がなせ長屋王、橘氏によつてもたらされたか、と云う事の解決にせまられる。まず橘氏の態度であるが奈良麻呂が右大臣に任命されるに当りなく、不比等時代に設置せられた安房、和泉、能登の三国が廃止せられ、和泉、佐渡等も廃止される。大規模な併合が爲され始めた天平十二年は奈良麻呂が右大臣に任命されて後始めの造籍年頃に相当し、国郡分割が爲される。とすれば絶好な年であり、事実この造籍年を境に以後

郷里制の廃止、郷制の施行。

郡司の員数の改正。

の如く地方行政に対し多くの新政策がおりこまれ、しかもその傾向は全般に縮小的傾向をもっている。国郡併合も橘氏の新政策の現われと考えられる。しかもこれらの政策は、藤原氏の政策と相反するものと考えられる。郷里制は聖武元年藤原政権の手によつて爲されたであらうし、郡司の員数は藤原氏の依つた令の規定によつていたものであり、そして併合された諸国へ佐渡を除くは同じく藤原政権により分割せられたものである。かく考えて来ると橘氏の態度は反藤原的面を多分に含有していたと云つても過言ではあるまい。所でこの様な縮小的方針の取られた根本原因は決して地方政治に対する不熱心さから来たのではなく、次の如き点が考えられる。

(1) 藤原氏の取つた地方政策があまり効果がなかつたのではないか。

(2) 国分寺建設の問題が出、その爲、より強力な地方支配体制を打ち立てる必要が生じて来た。

和銅以後に新設された諸国中には国分寺設置及び維持の負担にたえる事が出来ぬものが存し、かゝるものを廃し地方財政の健全化を計らんとしたのではない。

これらの理由に反藤原的氣風が加わり併合が施行されたのではなからうか。藤氏と橘氏の両には地方充実の方法に差が存したのみと考えられる。郡の場合も同様な理由のもとに、分割は行われなくなつたのではなからうか。

所で橘氏に先行する長屋王政权は橘氏とは全一に考える訳にはゆかぬ。長屋王時代は、不比等の死後の真空状態から分割が尋されなくなり、又国郡両者只分割の必要がない段階まで到達してゐたのではなからうか。

以上は諸兄の政策を不比等の政策と対比しつゝ、論じて来たが次の段階として復活期に仲麻呂政权と諸兄、不比等の地方政权を比較考察して見よう。天平宝字元年前に諸兄により廃止せられた和泉、能登、安房三國が再び分割されてゐる。所でこの耳は仲麻呂が紫微内相に就任した年であり、その

勢力は次々に伸長しつゝあつた時である。またこの耳は養老令の施行年でもある。ふりかへつて能登、安房両國の起原を求めるならばそれは既に述べた如く養老二年の事であり、又養老令拱修の年でもある。養老律令の拱修と兩國の設置は不比等の政策であり、養老律令の施行と再設置は仲麻呂の施政である。仲麻呂時代には奈良麻呂による改正が逆行している例が他にも多く存し、これらの諸点と仲麻呂の祖先崇拜とを考へあわせる時、兩國再設置の意義は明白となる。兩國の再設置は實際上の必要性よりは橘政权への抵抗、不比等の政策の復活という点に重要性をもつものではなからうか。

今迄不比等時代と云ふものを基礎とし、各政权を論じ来つたが、こゝで復活期と云ふものの由来について今少し考察して見たい。今日の学界に於ける復活期到来の見解では淨御原令と太宝令間の規定の差、即ち淨御原令の郡の大きさは大化改新詔に見える管郷数と同一であり、太宝令においてそれが修正され管郷数が減少した結果、分割の必

要が生じたのではなからうかとするものである。

しかしこの考え方に對し、

(1) 積極期は太宝令施行直後に判来していない。令の条文の差異から未だとするならばもつと早く積極期が来るべきである。太宝二年には全国的に造籍が行われており、一応それが淨御原令の規定によつて爲されたとしても、出来上った戸籍を土台に郡を分割しなす事も可能である。かゝる好条件下にありつゝも分割が行われていないのはなぜか。

(2) 続日本紀の記事に太宝と和銅間に分割記事が記載されて居らぬ事、

(3) もしこの期間に分割が爲されていたとするならば、当然文書として残る性質のものであり、又残らなかつたとしても新羅郡設置は地方政治上の一大改革であり、中央官僚層にも重大な影響があるものである故、入々の記憶に残るはずである。まして続日本紀のこの時代前後の著者は同一の人物であり、分割があつたとすれば必ず記載したであらう。

(4) たとえ太宝令の郡の等級を示す積極と淨御原令

の郡の等級の差があつたとしても、それを直ちに分割と結びつける事は困難と云ふのはならぬ。分割をせず等級を変更す事は良い。

(5) この事を更に強めるのは和銅以後、郡の分割の際、分割直前の原郡の管領数が二。以上のものゝない事である。

(6) 郡については解決がつくが、國の場をいかに解決するか。

等の疑問が生じ、以上の点より私は令文の相違以外により妥当性を有する原因をもとめたい。

さて積極期の第一耳目と目すべき和銅元年を變化するにその眼は不比等の右大臣就任の年であり、一方積極期の終りは養老四年不比等の死によりもたらされたと考えられる。かく考えれば見るに積極期は不比等と深い関連を有して居り、無視する事は不能である。不比等の政策を見る時、

風土記撰進

国郡名考字記

郡里別施行

国郡好字令等皆並籍之関連している。

これを太宰令と比較すると次第の如くなる。

郡					司	令
大郡	上郡	中郡	下郡	小郡	大領小領主政主帳	天平十二年改定
1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1
3	2	1				
3	2	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1
3	2	1	1	1	1	1
0	0	0	0	0	0	0

川長屋王と橘諸兄の政策は後者が前者の延長、
発展と見られない訳でもない。(表面的に見

た場合したとえは三世一身の法と墾田永世私
有令の如く。

(12) 坂本太郎博士「養老令の施行に就いて」中央学

雜誌四十七編八号所収

(13) 黒弘道氏「山城国葛野郡の分割——国郡成立史

上の一問題」続日本紀研究二一八所収

五、

以上藤原氏が国郡分割史上に大きな役割を果たした事を述べたが、然らば藤原氏はなぜ分割に関心を抱いたのであろうか。

藤原氏は律令編纂と深い関係を持つ事が頭に浮ぶ。鎌足は近江令撰修に関係したと云われ、不比等は刑部親王のもとにあって太皇律令を撰修、更に自らが中心となって養老律令の作成に当たっている事。この様な状況のもとにあっては必然的に律令政治に関心をよせるようになるであらうし、その爲には国、郡を出来る限り細分し、中央集権化をはかる事が必要である。

その際に問題となつて来るのは地方郡司の地位

を熱望して止まぬ旧国造階級である。結局彼等は郡司の权限と共に様々な特権に大なる魅力を感じたであらう。

さて藤原氏が律令制をより嚴重に施行せんとすればする程、いぜん地方に力を有している旧国造層を利用する必要が生じて来る。旧国造層をうまく利用する事により、又旧国造層と妥協する事によつて地方政治を円滑に動かす事が可能である。又郡の分割の際、非律令的空氣の存した原因も、この様な点にあるのではなからうか。しかし注意すべきは地方充実に関心をもちたのは、藤原氏のみではなかったことである。たゞその方法に大きな差が存したのである。橘氏の場合国郡を併合すると共に郡司の譜代主義を強化するという方法をとり地方充実に意をそゝいている。奈良時代の国郡分割が如くなる状態のもとに行われた事を主張し、本稿を終るが大方の御批判、御指導をいただければ幸いである。